

音 楽 科

音楽科部 紺野 伶音 稲森 稚明

研究協力者 吉田 秀文

1 音楽科における教科本質的な学びについて

感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、自分にとっての音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりする学び

音楽科の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」である。この見方・考え方を踏まえ、音楽科の教科本質的な学びを「感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、自分にとっての音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりする学び」とした。

本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには、音楽科の本質的な学びが欠かせない。子どもたちは、様々な音や音楽を表現や鑑賞することを通して、合唱や合奏等に喜びを感じたり、面白さや楽しさに心を動かしたりしながら、自分にとっての音や音楽のよさや美しさを見いだしていく。一人一人の感性を働かせて見いだした音や音楽に対するよさや美しさの共通点や相違点を共有する中で、自分の見いだした音や音楽のよさに気付いて確かなものにしたたり、友達の音や音楽に対するよさや美しさを自分の表現や考えに取り入れながら更新したりすることにつながっていく。音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりすることで、音楽の新たな魅力に気付き、より味わって聴いたり、生活の中に取り入れていったりしながら、音楽と豊かに関わることができるようになる。そして、自分と友達の音や音楽に対するよさや美しさを寄り沿わせながら音楽を楽しむ経験が、音や音楽のよさや美しさに共感する心や感動する心を育て、互いの考えを尊重し合いながら、共によりよく生きていくことができる生活を創造していくことができる。

2 研究の方向

音楽科の教科本質的な学びは「感性を働かせて、音や音楽から感じ取った曲想と聴き取った音楽の構造とを結び付け、自分のイメージや感情・経験と関連付けながら、自分にとっての音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりする学び」である。この教科本質的な学びにおける他者と協働して問題解決的な学習を行うことは、自分と友達の音や音楽に対する考えを、音や言葉で伝え合いながら、共に音楽に対するよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりするという意味をもつ。したがって、音楽科の学びの中で、非認知能力である「他者と協働する力」は、音楽表現を高めたり鑑賞を深めたりすることに向かって発揮される。

表現領域では、目指す音楽表現に向かう一人一人の思いや意図を基に、学級やグループで合唱や合奏をつくりあげたり、音楽づくりをしたりする。その際、音楽科の教科特性に着目すると、一人一人が音や音楽に対する感性を働かせて思いや意図をもつものの、互いの思いや意図に意識を向けられず、自他の思いや意図に着目しないまま、音楽表現の高まりが不十分になることがある。そこで、感性を働かせて捉えた、それぞれの音楽に対する思いや意図を共有し、互いの思いや意図を生かしたいとい

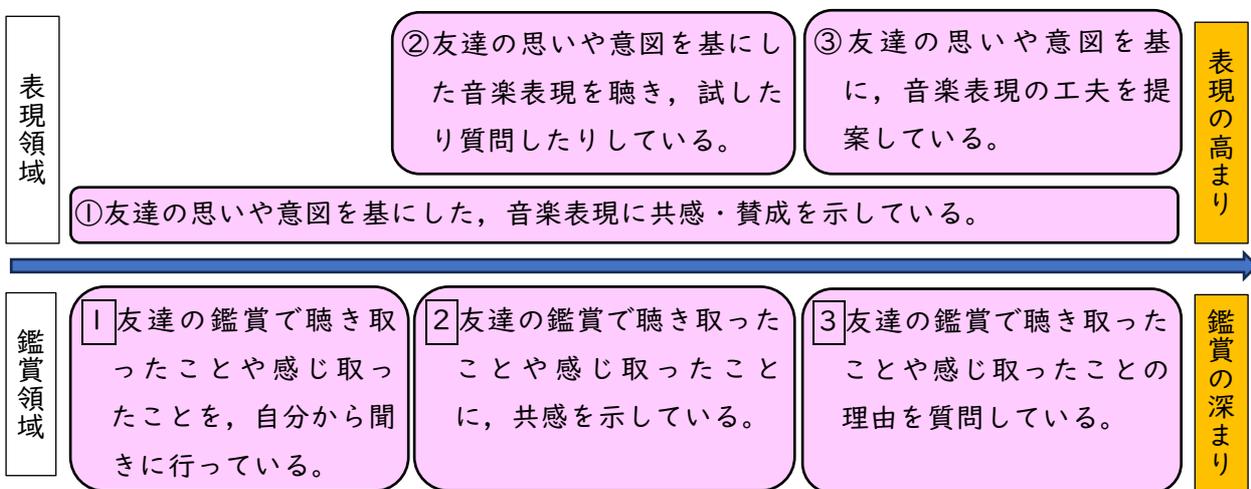
う願いを高めていく必要があると考える。

また、鑑賞領域では、音楽を聴くことに没頭し、自分なりのよさや美しさを見いだすことができる一方で、友達の聴き方を知る必要性を見いだせず、鑑賞が深まらずに満足してしまったり、自分一人では新たな音楽の構造に気付かなかったりすることがある。そこで、自他の鑑賞を深めるために、友達の気付いた聴き取ったことや感じ取ったことを知りたいという願いを高める必要がある。

そこで、子どもたちが、教科本質的な学びの中で、友達と音楽のよさや美しさを共有しながら自分の音や音楽に対するよさや美しさを確かなものにしたり更新したりするという学びを実現し、「他者と協働する力」を発揮する姿がさらに現れるように、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

(1) 「他者と協働する力」が発揮された姿



表現領域では、友達と共に音楽を表現したり、共に音楽づくりをしたりする中で、互いの思いや意図を伝え合いながら音楽表現を高めていく。それぞれの感性を働かせて音楽表現を考え、伝え合う中で、①の姿のように友達の音楽表現やその思いや意図を受け取った子が、「頷く」「たしかに」「いいね」といった共感や賛成を示すことが、友達の音楽表現を表出しやすくすることにつながり、様々な音楽表現を互いに伝え合う土台となる。②の、友達の思いや意図を基にした音楽表現を聴き、よいと思った音楽表現や自分の考えたものと違う音楽表現を試したり、理由を質問したりしている姿は、他者の音楽表現を受け止めながら、自分の音楽表現を更新していく姿である。友達の音楽表現を受け止め、自分もやってみよう、なぜその音楽表現をしたのか思いや意図を知りたいという意識をもち、互いの思いや意図を生かしながら音楽表現をしたいという願いが現れている姿ともいえる。そして、③の友達の音楽表現を聴いたり試したりしながら受け止めた上で、友達の思いや意図に合わせて自分の考えた音楽表現の工夫を提案している姿は、自他の音楽表現をさらに高めようと自分から他者に働きかける姿であるため、より他者と協働する力を発揮し、音楽表現の高まりに近づく姿である。

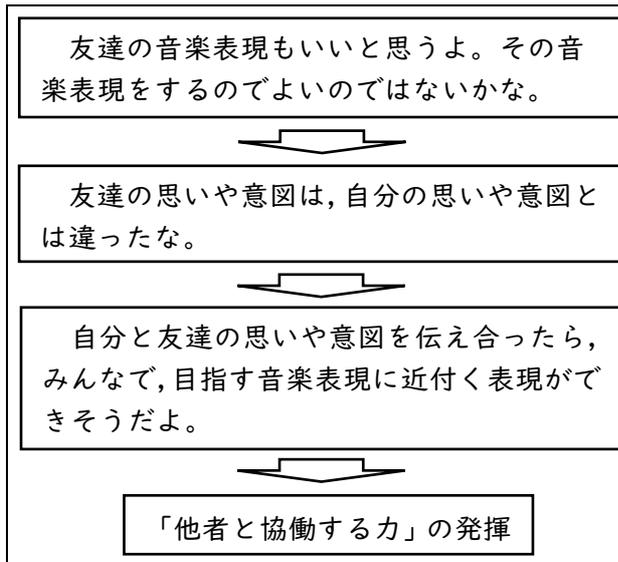
鑑賞領域においては、自分一人で聴き取ったことや感じ取ったことと、友達の聴き取ったことや感じ取ったこととを合わせながら、自他の鑑賞を深めていく。①の自分から友達のもとへ聞きに行く姿は、自他の聴き取ったことや感じ取ったことの違いに気づき、友達の考えを知りたいという願いをもったことで表れる姿である。そして、②の聴き取ったことや感じ取ったことを伝え合う中で、友達の見いだしたよさや美しさに共感し、自他の聴き取ったことや感じ取ったことから共通点を見付けてい

る姿は自分の音楽のよさを確かなものになっている姿である。また、友達の聴き取ったことや感じ取ったことを聞いている際に、自分の聴き取ったことや感じ取ったこととの相違点に気付くときもある。さらに③の自分との相違点に気づき、友達が聴き取ったり感じ取ったりしたことに対する理由を質問する姿は、友達の気づきから自分の鑑賞を深めようとしている姿である。

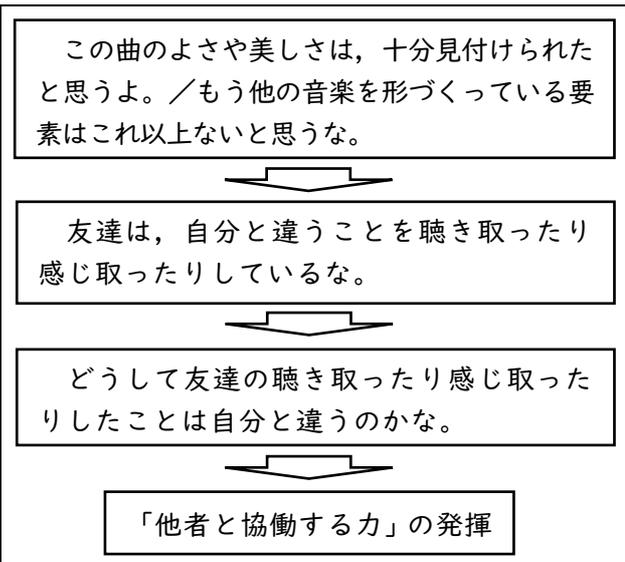
(2) 学びのプロセス

音楽科の問題解決の過程での、学びのプロセスを以下のように捉えた。なお、表現領域、鑑賞領域ともに、題材における【追求する】過程におけるプロセスである。

○表現領域



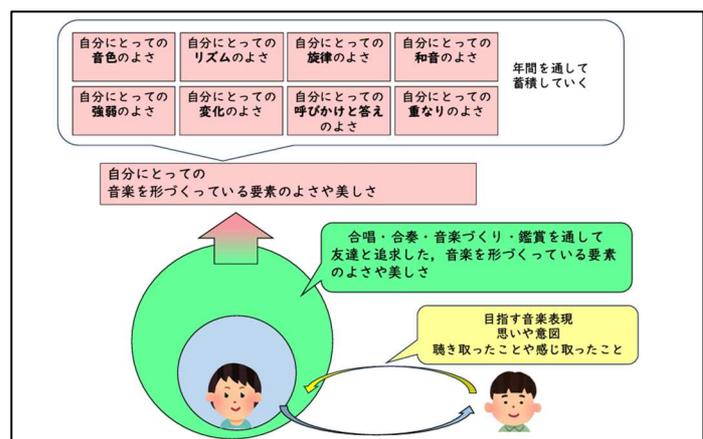
○鑑賞領域



(3) 学びのデザイン

①教科本質的な学び

音楽科の教科本質的な学びを踏まえ、音楽科を学ぶよさを子どもたちと、学期の初め、題材や学期の終末で共有する。音楽科では題材ごとに1~3つに絞って音楽を形づくっている要素（音楽の構造）を追求していく。それぞれの子どもが持っている、目指す音楽表現と思いや意図、聴き取ったことや感じ取ったことを、表現や鑑賞の活動の中で伝え合うことで、互いの感性を基に捉えた音楽のよさや美しさを更新したり確かなものにしたりにすることにつながる。音楽のよさや美しさ



<図1 音楽を協働的に学ぶよさ>

とは、表現や鑑賞の中で、自分のイメージや経験等と結び付けながら、実感を伴って感じ取ったり聴き取ったりした、音楽の構造に関わる音楽のよさと、歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞を友達と共に行うことで高まったり深まったりした活動に関わる音楽のよさである。これらを題材によって関連付けたり追加したりしながら、音楽を学ぶことで、自他の音楽のよさや美しさが広がっていく。そして、

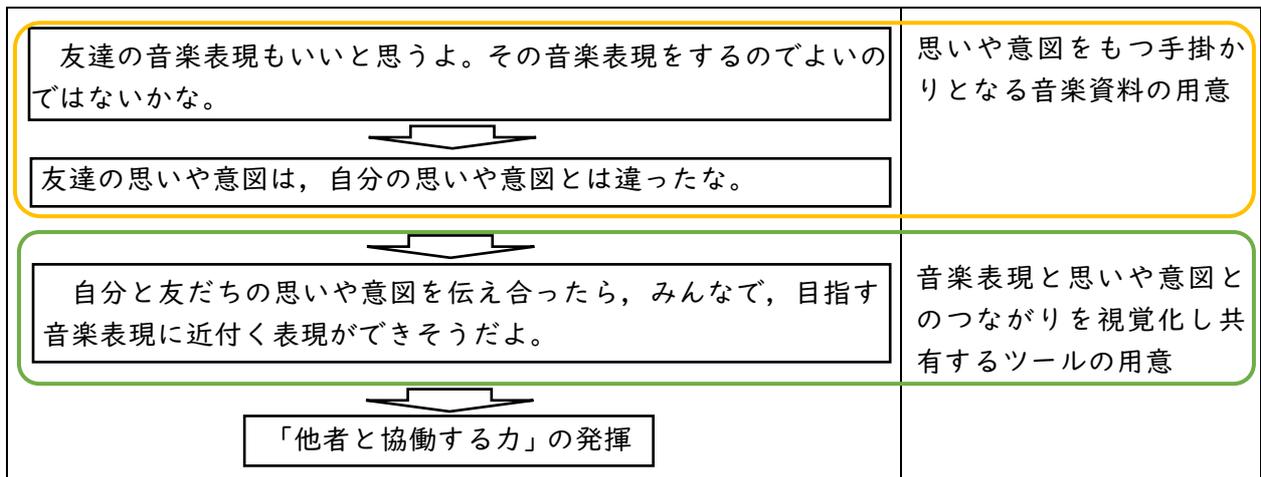
その中から自分にとってのよさを捉えることにつながる。この、互いの感性をもとにした音楽のよさや美しさを伝え合い、自他の音楽のよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりすることが、音楽を学ぶよさである。(図1)

また、音楽科における学びにおいて、思いや意図、曲想や音楽の構造とを結び付ける際にこれまでの題材で学習し、価値付けてきた音楽を形づくっている要素のよさを活用することを学習方略として捉えた。そして、音楽科における協働的に学習する意味を、自分と友達の声や音楽に対する考えを、音や言葉で伝え合いながら、共に音楽に対するよさや美しさを確かなものにしたたり更新したりすることとして位置付けた。

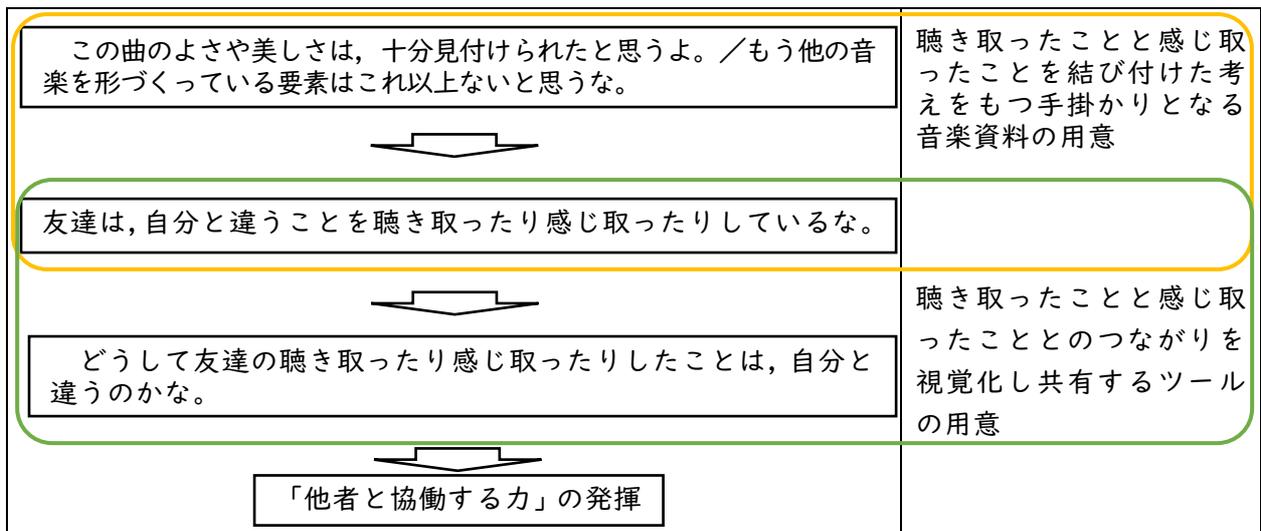
【つかむ】過程で、思いや意図を結び付けた経験や、曲想と音楽の構造とを結び付けた経験を基に、本題材でよりどころとなる音楽を形づくっている要素について見通しをもち、【追求する】過程でよりどころとした音楽を形づくっている要素を観点にして、表現した音楽や鑑賞した音楽を振り返る。そして【まとめる】過程では、友達とよさや美しさを共有しながら、自分の中で高まったり深まったりした、音楽を形づくっている要素を捉え直し、次の学びへとつなげる。

②プロセスを基にした学びのデザイン

○表現領域



○鑑賞領域



思いや意図をもつ手掛かりとなる音楽資料の用意（表）

聴き取ったことと感じ取ったことを結び付けた考えをもつ手掛かりとなる音楽資料の用意（鑑）

自分と友達の表現や鑑賞の仕方の違いに気付くためには、表現領域では自分の思いや意図をもつことが、鑑賞領域では、聴き取ったことと感じ取ったことを結び付けた考えをもつことが大切である。曲想や音楽の構造を根拠にしながらか自分の思いや意図（以下、下線部は鑑賞においては聴き取ったことと感じ取ったことを結び付けた考え）を明確にしていくことで、他者にも思いや意図があるはずということに気付き、思いや意図を共有しようという願いが生まれる。

そこで、思いや意図をもつ手掛かりにできるように、楽譜・音源・映像を音楽資料として用意する。それぞれの音楽資料から、思いや意図をもつための方法は以下のとおりである。これらの音楽資料を、発達段階や題材の目的、教材曲に合わせて教師が選択して示していく。

音楽資料	手掛かりとなる資料の活用方法
楽譜	強弱記号や歌詞などに着目し、作詞者・作曲者の思いを読み取る。
	楽譜の強弱記号や発想記号等に着目し、曲想や歌詞と関連付ける。
音源	場面ごとに分割した音源を用意し、個々にイヤホンで何度も繰り返し聴く。
映像	使われている楽器や表現方法、指揮者の動き等の視覚情報に着目して鑑賞する。
楽譜と音源	楽譜上にタイムバーを示し、聴いている箇所と楽譜の縦の関係に着目する。
音源・映像	音や音楽に合わせて体を動かし、音楽の特徴に気付く。

具体例 3年 題材名「ちいきにつたわる音楽でつながろう」

教材名『祇園囃子』『ねぶた囃子』『神田囃子』（鑑賞）

音楽資料：音源

方法：音楽に合わせて、体を動かす。体を動かしながら、地域に伝わるお囃子の曲想の違いを感じ取ったり、それらがリズムや楽器の奏法の違いによって生まれていることを聴き取ったりして考えをもつ。

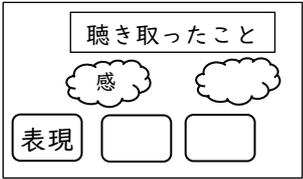
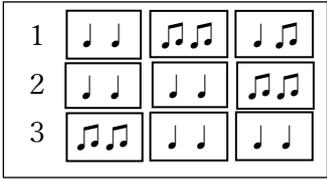
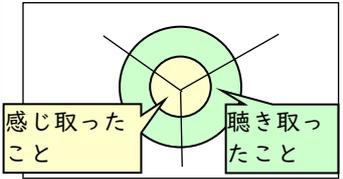


<図2 お囃子に合わせて体を動かしている様子>

音楽表現と思いや意図とのつながりを視覚化し共有するツールの用意（表）

聴き取ったことと感じ取ったこととのつながりを視覚化し共有するツールの用意（鑑）

表現領域において互いの思いや意図を基にした音楽表現を受け止め合ったり、鑑賞領域において音や音楽を基に聴き取ったことと感じ取ったことを伝え合ったりと、音や音楽を通して対話することが音楽表現の高まりや鑑賞の深まりにつながる。そこで、表現領域では音楽表現と思いや意図とのつながりを、鑑賞領域では、聴き取ったことと感じ取ったこととのつながりを視覚化して伝えるためのツールを用意する。それぞれを視覚化して共有するツールを用意することで、思いや意図を音楽表現と結び付けて言葉で伝えられるようになり、曲から新たに聴き取ったり感じ取ったりできるようになる。この共有するツールは、題材の目標や発達段階、子どもたちの願いによって教師が選択して活用する。その例と使い方の例は次頁のとおりである。

ツール	模造紙・拡大楽譜	ボード	ICT
学年	低学年～高学年	低学年～高学年	中学年～高学年
適した活動	<ul style="list-style-type: none"> ・学級全体で追求するとき ・全体合唱，全体合奏 ・鑑賞で曲想を感じ取る等 	<ul style="list-style-type: none"> ・少人数で追求するとき ・少人数での合奏，パートごとの表現 ・場面ごとの鑑賞等 	<ul style="list-style-type: none"> ・個や少人数で追求するとき ・音楽づくり ・個での鑑賞等
使い方			
	活用方法	<ul style="list-style-type: none"> ・基となる聴き取ったり感じ取ったりしたことと，考えた音楽表現の工夫を結び付けながら教師が整理する。 ・模造紙や拡大楽譜に示された内容を基に，音楽表現の工夫や想像したこと等を伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試行した内容を子どもが記録していく。カードやマグネットを動かしたり，楽譜に直接書き込んだりする。 ・ボードを見せながら，他グループへ伝える。

具体例
6年 題材名「日本と世界の音楽に親しもう」
教材名『バグパイプ』『グリオ』等

ツール：ICT
活用方法：
曲を聴きながら，聴き取ったこと（上段）と，感じ取ったこと（下段）を結び付けて整理していく。記述したシートを用いて，友達に気付いたことを伝え合いながら，新たな気づきを黄色で記入していく。



<図3 ICTを用いた共有シート>

4 成果と課題

本校音楽科における問題解決的な学習の中で、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて、「他者と協働する力」を発揮する学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果，次の様な成果と課題が明らかになった。

○成果

音楽資料を手掛かりにして，表現領域では，音楽表現と自分の思いや意図とを結び付けた考えを，鑑賞領域では，聴き取ったことと感じ取ったこととを結び付けた考えをもつことができた。そして，それらを友達と伝え合うデザインを設定したことで，自他の思いや意図・考えの共通点や相違点に気付くことができ，他者にも思いや意図・考えがあるはずという気づきへとつながった。また，共有するツールを用意し，自分の思いや意図・考えを視覚化したことで，自分の思いや意図・考えを言葉や音で伝えやすくなり，聞いている側も思いや意図・考えを受け止めやすくなった。そのため，共感・賛成を示したり，真似したり，試して提案を伝えたりする他者と協働する力の発揮へとつながっていた。他者と協働する力が発揮され，共感的に相手の願いを受け止め，互いに生かしながら音楽表現を考えたり，鑑賞したりすることができていた。

○課題

共有するツールを使用した際に、ツールの中に自分の思いや意図、聴き取ったことと感じ取ったことを記述していくことで視覚化できたものの、表現領域ではよりよい音楽表現を選択することに意識が向き、複数の考えを反映できないことがあった。また、鑑賞領域では記述をしすぎて自分では整理がしきれない子どもの姿も見られた。表現領域では、子ども同士の思いや意図を音楽表現につなげることができるように、様々な音楽表現を試して蓄積していく機会を設定するとともに、それぞれの思いや意図を生かしながら、音楽表現を高める方法を模索する必要がある。また、鑑賞領域では、教師が提示するツールを精査し、子どもが整理できるようにツールの内容を考えていく必要がある。

【参考文献】

- ・高倉弘光，音楽ラボラトリー研究会（2019）『音楽授業の「見方・考え方」成功の指導スキル& 題材アイデア』，明治図書出版株式会社
- ・公益財団法人音楽鑑賞振興財団編（2024），『音楽鑑賞教室』季刊，Vol.56